

## 博士学位論文内容の要旨

学位申請者氏名	松林 和佳子		
論文題目	E. M. Forster の作品における「ファンタジー」の諸相		
論文審査担当者	主査	松宮 園子	Ⓔ
	審査委員	金澤 哲	Ⓔ
	審査委員	鴨川 啓信	Ⓔ

一般的に「ファンタジー」とは、「自然や日常世界とは異なる現実」や「起こり得ないこと」を描いた物語とされている。しかし、どのような作品を「ファンタジー」と捉えるかは批評家によって異なっており、ファンタジーを明確に定義することは困難である。各批評家による様々な議論をもとに、どのような作品を「ファンタジー」と捉えるのか改めて考えてみると、超自然を描いた物語のみならず、かなり多くの物語がファンタジーと呼ばれる可能性を有していることに気付く。

*Howards End* (1910) や *A Passage to India* (1924) の著者として知られる E. M. Forster もまた、*Aspects of the Novel* (1927) の中で独自のファンタジー論を展開している。彼は「ファンタジー」を「ふつうの小説とは違った読み方を読者に要求する要素」と定義し、必ずしも超自然現象が起こる必要はないと述べる。小説にはストーリーや登場人物などの主要な構成要素以外に、これらを「ひとすじの光 (a bar of light)」のように横切る何かが必要であり、「ファンタジー」はその光を構成する要素の一つと考えられているのだ。

ギリシアの神や妖精が登場する文字通りの意味でファンタジーと言える短編小説から、異国を舞台にした長編小説、英国の現代社会における諸問題を追究した物語、西洋/東洋あるいは帝国/植民地の相互理解の可能性を探った大作に至るまで、Forster の作品には「ファンタジー」の要素が多様な形で組み込まれている。物語の中で突然読者に「違う読み方を要求する要素」は、時に物語の現実感を希薄にし、小説の整合性を乱してしまう。しかし、Forster の「ファンタジー」論を手掛かりに、読者に違和感を与える描写の数々を検討すると、それは作者が意図した小説の効果であることが明らかになってくる。そこには小説という手段を用いて読者の現実に対する感覚を揺るがせ、現実社会の認識を変革したいという Forster の意気込みが潜んでいると考えられる。

本論文では、初期の短編小説から *A Passage to India* までの作品を数点時系列に取り上げ、それぞれの作品に組み込まれているファンタジー的要素とその変遷を分析する。そして、ファンタジーがもたらす効果についての Forster の見解を検証しつつ、Forster 作品におけるファンタジー的要素の包括的評価を試みる。

第1章では、Forster の最初の短編小説“The Story of a Panic”(1904)を取り上げる。この物語に描かれるパンの世界は、得体の知れない恐怖を人間に感じさせるとともに、主人公の少年には現世からの解放をもたらしており、そこには知性を過度に重視する文明に対する疑問や、人知を超える

世界への憧れとともに、知性の通用しない世界に踏み出すことの危険性が示唆されている。この物語におけるファンタジー的要素は、知性を基盤とする人間の世界と人知を超える自然の世界の危うい関係性を効果的に描き出している。

第2章では、1903年に執筆された“The Road from Colonus”とその翌年1904年に執筆された“The Eternal Moment”を取り上げ、これまでの短編小説と比較しつつ、Forsterが用いるファンタジー的要素の変化について分析する。現実世界の描写や登場人物の葛藤に焦点が絞られているこれら2つの短編小説は一般的な意味でのファンタジーとは異なるが、これらの作品にも現実とは次元の異なる世界を垣間見せる描写が随所に存在している。本章では、この2編が別世界そのものではなく、別世界の存在を垣間見せるような描写を用いて登場人物の変化を浮上させている点に注目し、非日常的な体験と日常の人生を融合させることは可能なのかという新たなテーマに取り組むことによって、より日常と隣接する新しいファンタジーを模索し始めたForsterの新たな視座について考察する。

第3章では、初期の長編2作 *Where Angels Fear to Tread* (1905) と *A Room with a View* (1908) を取り上げる。これらの物語では、主人公たちはそれぞれ平穏な日常を守る枠組みから外の世界へ踏み出し、様々な状況下で「本物 (the real thing) 」に接触することによって「日常を打破する新しい時空間」を体験する。彼らの現実社会における生活と内面の葛藤を詳細に綴った物語は、イギリス文学伝統の風習喜劇を思わせる構成となっており、ファンタジー色の濃い短編小説群とは一線を画している。しかし、主人公達に衝撃を与える「本物」の意味を追究していくと、一見ファンタジーとは何の関わりもないように思えるこれらの小説が、ファンタジー小説の主題とも言える「現実とは何か」という問題について、より深い洞察を示していることに気付く。本章では、物語の主人公たちと「本物」との関わりを分析し、現実に対する新しい見方や現実の定義の曖昧性を示唆しているという観点から、Forsterによるファンタジー的要素の発展について検証する。

第4章では、Forsterの唯一のサイエンス・フィクションである短編小説“The Machine Stops” (1909) を取り上げた。この作品は一種のファンタジーであるという点で、初期の短編小説群と同じカテゴリーに属する作品として論じられることが多い。しかし本作に描かれている架空の世界は機械に統制された人工的な世界であり、初期の物語に登場する幻想世界、人間の知性をを超える荒々しい自然に根差した世界とは全く異なっている。また、技術の発展によって理想的な状態に整えられた世界が徐々に人間の自由を奪っていく一方、解放への道は、人間が地球の表面上で自らの意思によって身体を動かしていた「過去の生活」の中に示されており、柵のある現実と解放をもたらす幻想世界という関係が初期の作品群とは反転していることが見て取れる。本章では、本作におけるファンタジー的要素が我々の日常生活そのものの素晴らしさに目を転じさせる効果を生み出していることを検証する。

第5章では、4番目の長編 *Howards End* を取り上げる。これまで欠点として捉えられることの多かった現実味に欠ける描写が、登場人物の造形や物語の展開、何気ない風景描写など、様々なレベルにおいて日常の思いがけない諸相を浮上させることにより、現実に対する認識を揺るがすというこれまで見てきたファンタジー的要素と共通する役割を果たしていることを論証している。さらにこの物語におけるファンタジー的要素は、現実を生きる登場人物達が、彼らの意思を超えた次元で徐々に結びついていく様を浮上させようとしており、社会的束縛や階級差を超えた理想の共同体

を構築しようとする Forster の試みと関わっている点についても考察を加えた。

最終章となる第 6 章では、Forster の最後の小説 *A Passage to India* を取り上げた。主にマラバー洞窟の分析を通して、他の作品におけるファンタジー要素との類似点・相違点を明らかにした上で、この最後の長編小説に含まれるファンタジー的要素の役割が、葛藤を抱えた人間が多層な日常の中を生きていくという複雑な現実世界の実態を、より立体的に提示することを目的としている点について検証する。

本論文において、ファンタジーという概念を軸に Forster の小説分析を行うことにより、彼が独自のファンタジー的要素を用いて現実の多層性を描き出している事実が浮き彫りになってくる。Forster が作家として活躍していた 20 世紀初頭には、モダニズムという大きな変化の波が文学界を襲った時期であった。モダニズムの代表的な作品とされているのは、「意識の流れ」などの実験的手法によって新しい小説の可能性を切り開いた Virginia Woolf や James Joyce の作品であり、それらに比べてゴシック小説やファンタジーは単なる逃避の文学として軽視される傾向にあった。しかし、John Paul Riquelme が *Gothic and Modernism : Essaying Dark Literary Modernity* (2008) の序章で指摘しているように、近年この 2 つの動きの関連性が指摘され、注目されるようになってきている。Forster の作品は、同時代の Woolf や Joyce の作品に比べて一見保守的であり、モダニズムの作家たちとは性質を異にしていると捉えられることも多いが、現実 / 幻想、日常 / 非日常を隔てる境界線の曖昧性を提示し、読者の現実に対する認識に一石を投じようとする試みにおいて、彼らとの共通性が感じられる。Forster は、読者に現実の新たな側面を見せる装置として、登場人物やストーリーに違った角度から「ひとすじの光」を当てることのできる「ファンタジー」の効果に早い段階から気づき、その可能性を押し広げたとと言える。ファンタジー作家として著名な Ursula Le Guin は「ファンタジー」という言葉の歴史を辿り、もともと「本質を見せる」という意味があることを明らかにしている。Forster が作品に織り込むファンタジー的要素は、Le Guin の指摘するファンタジー本来の役割を思い起こさせる。このような Forster 独自の「ファンタジー」という概念の複雑さを軸に、最初期の短編から後期の代表作を幅広く検証してみると、彼が作家としてのキャリア初期の実験としてファンタジー的要素を使用したわけではなく、現実と正面から向き合い、その本質に迫るために不可欠な方法として、その姿を様々に変容させながら作品に組み込み続けていたことが結論される。一般的な「ファンタジー」の枠組みにとらわれない Forster の創作上の試みと向き合うことは、Forster 作品の再評価のみならず、21 世紀の文学におけるファンタジーの多様性と効果についても新たな展望を提供するものと考えられる。